



# 「かって孤立していた私へ」

ほっとぽっとピアスタッフ 和田 公一

この度、やどかり出版より、旭区のブックレットが発刊する事になった。私も編集委員として、この本の発刊に際して、何度もミーティングに加わった。私は、この本が「誰のために？何のために？」発刊するか、徹底してこだわった。旭区だけの自己満足になりたくなかったし、メッセージのバックボーンの不明な本なんて意味が無いと考えたからだ。ああこうだと検討を重ね、ついに「ひとりぼっちのあなたへ」が完成した。

朝、目が覚めて、まず絶望する。そんな時代が私にもあった。その当時私は、ひとりぼっちだった。病気に溺れ、就労にこだわり、嫌になる程、履歴書を書いた。友達もいない。親ともうまくいかない。生活保護になるなんて思いつかなかった悲痛な一人暮らし。私は孤立していた。私はこの本を、その当時の私に捧げたいと思っている。生きていてよかった。今、私は孤立していない。そしてこの本を、多くの孤立しているまだ見ぬ友へ読んでもらいたいと思っている。この本によって、孤立しているまだ見ぬ友に、希望を与えたい。

この本にはそういった使命感があると私は考えている。 (2011年3月)

## 当事者のメッセージ、旭区つながり 満載の本ができました！



【内容】はじめに／

第一章 素顔で社会に出る

第二章 ひとりじゃないみんないる

第三章 夢が現実になる

第四章 座談会

第五章 納得して生きる、それが自立

資料／あとがき

【発行】やどかり出版／1,000円



ほっとぽっと  
で販売中

旭区セミナーが10年目を迎えた一昨年のこと。「70才を過ぎた今が青春」というある男が言った・・・旭区の人たちの年々の「成長」のプロセスを本にして知らせることが全国の様々な人たちのちからになる。それを聞いた旭区一の熱い男が「よしっ、やろう」。2009年11月、本作りが始まる。

70代の青年は、やどかりの里の当事者でブックレット編集委員の堀澄清さんその人であり、熱い男は言わずと知れた当会前理事長・田山裕文さんである。さて、そこからがタイヘンであった。どんな原稿をどう掲載するかをまず旭区で考えて～とゲタを預かったものの方向性がなかなか定まらず、毎月10人程が参加した編集委員会は難航。熱いリーダーが本領発揮し「熱発」、会議途中で帰ってしまうといったハプニングもあった。記録係で参加していた私は毎回くらくらと船酔い気分だった。

船の針路が決まったのは青葉繁れる初夏の頃だった。いま未だ孤立の中にいる人たちに向けてメッセージを送ろう、苦しかったこともできるだけ書こう、と。そこからは早かった。当事者の人たちの原稿が次々に出来てくる。どれもみな目を見張るほど素晴らしかった。そして、様々な人たちが一緒にやっている旭区らしさを出すために家族や支援者にも書いてもらうことになった。当事者の人の発案だった。私も「歩み」を書いた。原稿がだいぶ出そろった晩秋には、まとめとして「座談会」が行われた。

第12回セミナー当日の3月5日。前日刷り上がったばかりの本が公会堂ロビーに平積みになった。セミナー後の交流会で堀さんは「地域のことを知らせるためドクターの人たちにはぜひ買って読んでもらおう。悩み多き一般の人にもきつと役に立つはず」とアピール。二人の男の夢がかたちになった。

渡邊昌浩さん他やどかり出版の皆様に厚く感謝します。ぜひ、お読みください！ 【市民の会・川田 剛】